

第4章

未来につなげる 産業経済



第1節 伝統をつなぐ農業

農業のうつりかわり

●農業の推移

名古屋のベッドタウンとしてのイメージが定着したまちでは、農業がどのように営まれてきたのでしょうか。

昭和 50（1975）年頃は、人口の増加とともに、道路も整備されつつありましたが、まだ田畑が多く広がっていました。収穫されるものは米を中心に、野菜類も多く栽培されていました。

その後、年々、田畑が減少していききました。

昭和 50 年と平成 27 年（2015）年と比較すると、販売農家は半分以下に減り、特に田の面積は約 4 分の 1 と

なりました。

農地面積の比率は、昭和 53（1978）年は約 46%でしたが、令和 4（2022）年では、約 17%となりました。

●町の名産品

昭和 50 年には、養鶏場や乳牛牧場、豚舎などもあり、農産物も大治かぶらや砂子南瓜など、種類も豊富でした。

しかし、都市化が進むにつれ農地が減少し、農産物の種類も減少していききました。

このような状況ではありますが、町の特産品が作られています。



田植え（西條 昭和 20 年代頃）



実りの稲穂をはさがけに（馬島 昭和 49 年）



豊作を祈って苗作り（北間島 平成 9 年）



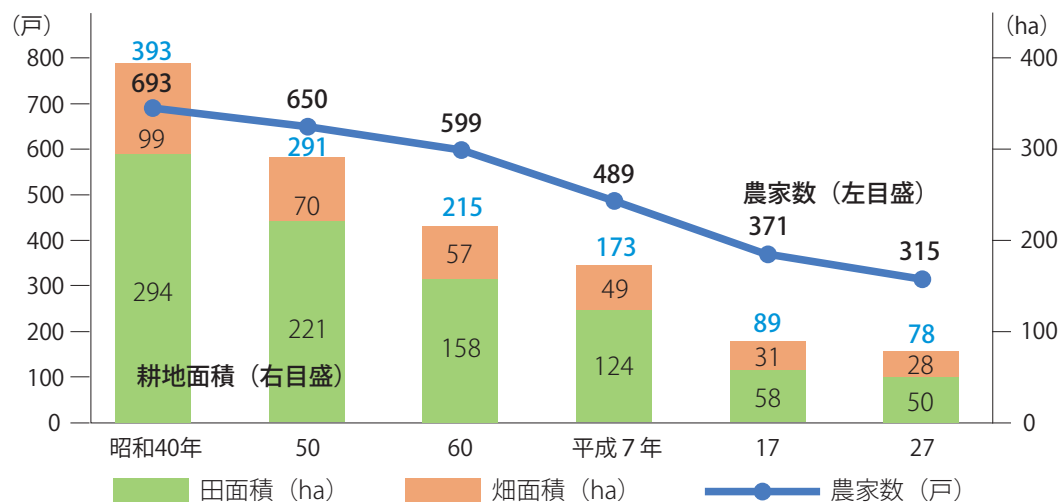
赤シソの収穫（平成 17 年）

表 4-1 農業産出額の推移

（百万円）

年	昭和 50 年	昭和 60 年	平成 7 年	平成 17 年	平成 27 年
産出額	479	550	600	470	370

図 4-1 農家数・田畑面積の推移



（農林業センサスより）

その一つが、赤シソです。

赤シソは、町のマスコットキャラクター「はるちゃん」のモチーフになっており、庄内川の河川敷一面が赤紫色に染まる風景は、初夏の風物詩となっています。この赤シソは有名で、全国に出荷されています。

また、ハウレンソウや小松菜、モロヘイヤなども特産品です。

これらの野菜は、地産地消として学校給食で提供され、子どもたちにも喜ばれています。

一方、農業従事者の減少と高齢化が顕著となっています。

<特産野菜>

・赤シソ

町では、戦後間もないころにはすでに、栽培が始まっていたようです。

その質の良さが知られ、生産が盛んになり、昭和 40 年代に、しそ出荷組合ができました。

梅干しの色付けや塩漬けのほかに、ジュースに使用されます。

シソの名前の由来は、食中毒で瀕死の少年に葉を煎じて飲ませたところ、命が蘇ったことから「紫蘇」とつuitaといわれています。

・モロヘイヤ

古くからエジプトを中心に栽培され



大治南小学校の児童が育てたモロヘイヤ

ており、クレオパトラも好んで食べていたと伝わっています。

重病を患ったエジプト王が、このスープを飲んで回復したことから、「王様の野菜」を意味する言葉が語源となったとの説もあります。

町では、平成8（1996）年頃から栽培が始まりました。

<伝統野菜>

・砂子南瓜（ちりめん南瓜）

明治時代末期ごろには、砂子で栽培



砂子南瓜

が始まりました。大きく扁平で、表面に小じわが多く、ごつごつした見たいをしています。水分が多く、西洋カボチャよりもあっさりしています。

・大治かぶら

江戸時代末期に尾張白かぶらとして育成されたもので、大治や甚目寺（現あま市）の特産品でした。

直径15cmほどの大型のかぶで、尾張大かぶ（大丸かぶ）として、各地で販売されました。

大治農協から JA 海部東、さらに JA あいち海部へ

●大治農協と大治町農業振興会

昭和24（1949）年1月に、大治村



大治町農業協同組合（昭和49年）

農業協同組合ができました。

その後、昭和52（1977）年に大治町農業振興会が組織されました。

農業振興会は、大治町農業協同組合と共に、農業の発展に貢献してきました。主に害虫の駆除や講習会、野菜の品評会などの地域活動をしています。

● JA 海部東の概要と活動

大治町農業協同組合は、平成7（1995）年に津島市の神守地区、海部



JA あいち海部大治支店

郡の七宝町・美和町・甚目寺町の農業協同組合と合併し、「海部東農業協同組合」となりました。通称は「JA 海部東」です。

令和6（2024）年7月に JA 海部東は、津島市と海部南西部を拠点とするあいち海部農業協同組合（JA あいち海部）と合併しました。

JA は、農業や金融など、幅広く農家を支えています。

町の農業との関わりでは、特産品である赤シソやホウレンソウ、モロヘイヤなどの集荷と販売などを行っています。



出荷準備が整ったホウレンソウ

●活気あふれる「元気朝市おおはる」

平成15（2003）年12月から、地産地消や農業の活性化を目的として、「元気朝市おおはる」が開催されてい



とれたての野菜がたくさん 元気朝市おおはる

ます。生産者が自ら育てた農産物を持ち寄り、直接販売する朝市です。

「とれたての野菜が、安く手に入られるのがうれしい」と多くの町民から親しまれています。

また、「収穫祭」や「感謝祭」などのイベントもあり、とても人気があります。

●「あいちのかおり」から生まれた「かぶとまい」

「かぶとまい」は、旧 JA 海部東管内で栽培される、プライベートブランド米です。この地域で収穫できるお米の認知度を上げ、より広く普及させるためにブランド化しました。

海部東部は、蜂須賀小六や福島正則など、戦国武将を多数輩出した地域です。その武将をイメージしたキャラクター「戦国かぶとくん」が作成され、パッケージのデザインにも登場しています。

平成8年に、一般公募で寄せられたアイデアの中から選ばれました。

品種は、愛知県が育成した「あいちのかおり」です。この品種は、香るよう^{ほうじゅん}に芳醇な味がします。大粒でやや長く、炊きあがりの粘りが控えめで、あっさりした食感が特徴です。

町内をはじめ、海部東地域の学校給食にも使用されています。また、平成24（2012）年からは、JAから学校へかぶとまいの寄贈があり、令和5年で12回目を数えました。

なお、令和6年7月にJA海部東がJAあいち海部と合併したことを機に、「かぶとまい」は「あまじまん」という名称に変わりました。



子どもたちのために



「かぶとまい」から「あまじまん」へ

第2節 暮らしを支える商業

商業のうつりかわり

戦前は農業が中心だったため、大きな市場や商店街もなく、各地区によるず屋的な商店が点在するだけでした。

その後、昭和30年代から50年代にかけて、高度経済成長に歩調を合わせるかのようにまちの人口が増え、日用品を扱う店や、商店の並ぶ通りが形づくられていきました。

この時期の商業の特徴は、工場と住宅地が一挙に増え、その住民の消費を賄うために、スーパーマーケットなどの流通業が急増したことです。

50年代前半には、大治ストア、スーパーマルケイ、アオキスーパー（青木ショッピングセンター）、柿ノ木センター、大治センター、ユーストアなどのスーパーマーケットが次々に開業しました。

町の面積は大きくはないものの、県道沿いに商店街ができ、活気にあふれていました。

しかし、大治町の商業の規模はそれほど大きくはありませんでした。それ



多くの買い物客が集う大治センター（昭和55年頃）

は、隣接する名古屋市の百貨店や飲食店などを利用していたことが理由と考えられます。

昭和時代の終わりから平成に入ると、コンビニエンスストアや外食チェーン店が見られるようになりました。

平成から令和にかけては、駐車場が広いドラッグストアや町外の郊外型店舗が増えてきました。その結果、町内の小売店が減少していきました。

商業の状況も変わりつつあります。

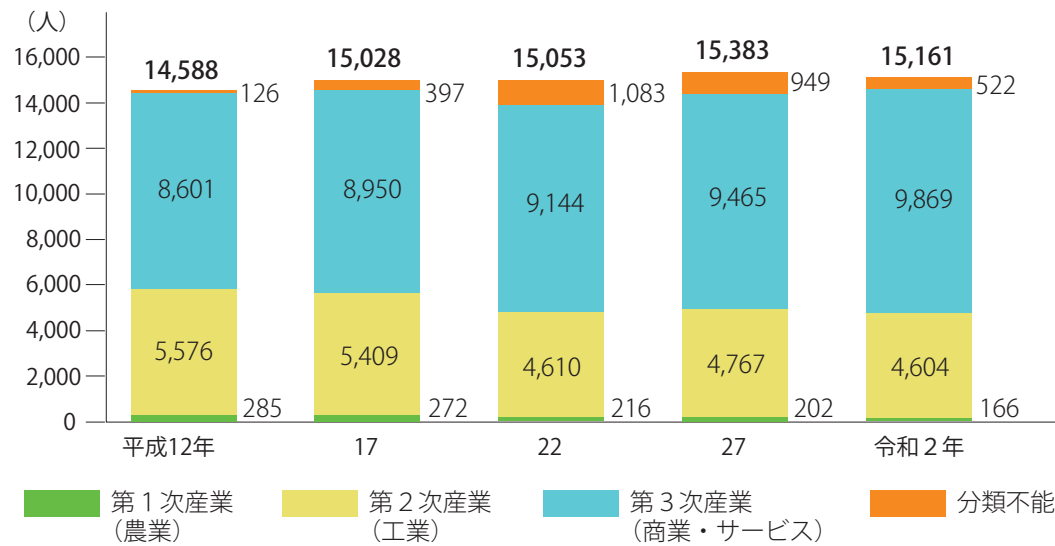


活気づくバス通り

表4-2 昭和51年の商業の状況

	卸売業	小売業	飲食店
商店数	11	161	55
従業者数（人）	121	365	127
商品販売額（万円）	310,092	320,930	32,267

図 4-2 産業別就業者数の推移



町民の就業の状況を見ると、都市化により農業などの第1次産業の減少とともに、工業などの第2次産業も減りつつあります。

一方、商業やサービス業である第3次産業は増加しています。

具体的には、銀行や医療機関、福祉事業所、塾などの教育サービス、外食産業などが増加しており、多様化する

ニーズを反映しているといえます。

インターネットなどによる通信販売の利用者も増加しています。

「近所の商店が店じまいした」「商店の跡地が住宅になった」など、かつて町のにぎわいの中心であった商店街もなくなっていき、景観も変わってきました。

地域とつながる商工会

●商工会の誕生

昭和35(1960)年に商工会法が施行され、翌年に大治村商工会が設立されました。

当初の会員数は131人でしたが、昭和50(1975)年には個人会員が300人を超え、法人会員も40社を超える大規模な組織になりました。

その後、昭和56(1981)年に女性部、昭和61年に青年部、令和2(2020)

年に壮年部を設置しています。

会員数も平成元(1989)年に514人、



新築された大治町商工会館(令和6年)

令和元(2019)年に646人、令和5(2023)年には718人と順調に増えています。

●活発な青年部と女性部

青年部には令和6(2024)年12月時点で101人が所属しており、絆感謝運動として、町内の清掃や商工祭などの地域への貢献活動をしています。

また、女性部では平成30(2018)年から女性部通信「ひととき」を発行し、活動の内容を広報しています。



青年部の清掃活動

●充実した商工会の経営支援

商工会は、小規模事業者に寄り添って、経営の基本的なマネジメントや財務管理、資金の調達など、専門家と共に支援をしています。

そのほか、税務や経理の仕方、社会保険や労働保険の事務処理の代行など、総合的に町内の商工業の発展のために尽力しています。

●長年にわたって「祭り」を開催

昭和38(1963)年の「年末大売り出し」を皮切りに、地域振興事業として商工祭を毎年開催するようになりました。

昭和59(1984)年の「第1回福祉まつり」に模擬店を出し、昭和62(1987)年には福祉まつりに「商工まつり」として参加するようになりました。



女性部通信「ひととき」創刊号



多くの来場者でにぎわう、はるウイン

そして平成5（1993）年には「ふれあいフェスティバル」と名称を変えました。

令和元年は、青年部主催の「はるウイン」も開催しました。

令和4（2022）年には商工会独自の「商工会祭り with はるウイン」に引き継がれている歴史のあるイベントです。

また、平成22（2010）年9月に、商工会法施行50周年を祝して、「フレッシュ大治・商工まつり」を開催しました。

元中日ドラゴンズの立浪和義氏のトークショーや神楽揃えなどで、多くの町民が楽しみました。



●各地の商工会と友好交流協定を締結

平成27（2015）年度に、三重県大台町と商工会同士の友好交流協定を結びました。大台町と大治町は、町名が似ていることから、交流が始まり、この協定につながりました。

令和5年6月に東栄町商工会と、10月には美唄商工会議所と友好交流協定を結びました。



美唄商工会議所との協定書の調印式

特産品を使用した商品開発

●粉末モロヘイヤでメニュー開発

まちの特産品であるモロヘイヤを生かした商品も開発しています。

6～8月に収穫したモロヘイヤを、三重県大台町に直送して粉末をつく

り、オリジナルメニューを開発して、町内の飲食店で販売しました。

平成31（2019）年のスタート時点では8店舗が参加したほか、新規での取扱店も募集しました。



「モロヘイヤ」特産品グルメ MAP

モロヘイヤ粉末入りのスムージーやお好み焼き、揚げ出し豆腐など、多種多様な商品がそろいました。

●赤シソジュースやリキュールも好評

「赤シソジュース」は、初夏の定番のジュースで、各家庭で作られています。

沸騰させた湯に赤シソを加え、再沸騰したら赤シソを取り出します。残ったエキスを砂糖を加えて煮つめたらクエン酸を加え、お好みでイチゴエッセンスを数滴たらし、冷ましてこすと、



清涼感あふれる赤シソジュース



愛知万博10周年記念イベントなどでリーフカレーを販売

できあがりです。

また、町内の酒類販売業者では、赤シソを使ったリキュールを製造販売していました。パッケージイラストを大治中学校の美術部に考案してもらう企画もしました。

町制施行40周年記念に、大台町とコラボして製作したレトルトカレー「リーフカレー」は、販売するたびに完売する人気商品でした。

Column 子どもの聖地 まちの駄菓子屋さん

昭和時代、町内には駄菓子屋と呼ばれるお店がいくつもありました。

当たり付きのお菓子や安価で楽しめるメダルゲームなど、子どもが遊びや

すい環境がありました。

スーパーやコンビニの誕生により、その数も徐々に減っていき、今では貴重な思い出となっています。

第3節 歴史を支える工業

工業のうつりかわり

●伝統的な工業が息づくまち

町の伝統的な工業の一つに「七宝焼^{しっぽうやき}」がありました。

七宝焼は、七宝町（現あま市）で、江戸時代の後期から盛んに作られていました。

七宝町に隣接する大治町でも、明治20（1887）年頃から西條で作り始め、職人が七宝焼組合に加入するなど、盛んに制作していました。

ところが、後継者の不足で技術の継承ができなかったこと、海外からの輸入に圧されるなどの理由で、明治時代後期に町の七宝焼の職人が減っていききました。

明治時代初期からは、「扇骨^{せんこつ}」が作られ始めました。

昭和16（1941）年に大治扇骨組合ができ、最盛期を迎えました。

しかし、生活様式の変化や文化面での活用が減ったことなどから、一大産業だった扇骨業も衰退していきました。



七宝焼職人・吉田雄氏の作品展



七宝焼制作作業



町の七宝焼職人（吉田雄氏）による作品

●町で活躍する企業

純農村地帯であった大治に、昭和35（1960）年頃から工業化の波がやってきました。

この高度経済成長期に、名古屋市内の会社や工場が市外への移転を積極的に進めました。この動きにより、町にも企業、特に工場の数が急増しました。

町では、西條に工業地帯があり、そこに大きな工場が集まっています。

町の経済を支える企業のうち、敷地面積の大きい主な企業を紹介します。

フタムラ化学株式会社 包装用プラスチックフィルム



アイカテック建材株式会社 けい酸カルシウム板、多機能建材



新東工業株式会社 表面処理（バレル・ブラシ研磨） 装置及び検査装置



株式会社富士金属 自動車用部品



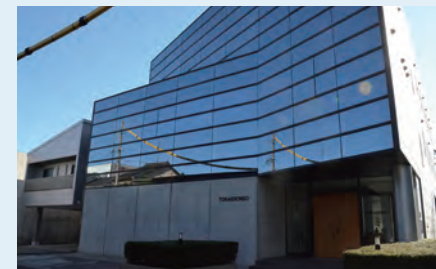
株式会社大竹製作所 農業機械



株式会社三洋化成 ビニールホース



東海電装株式会社 自動車及び二輪車用ランプ



株式会社さんわコーポレーション 鶏肉加工品



特産品の^{せんこつ}扇骨

江戸時代の西條村では、竹林が点在していたことから、年貢の一つとして、竹を尾張藩に納めていたことが、『尾張徇行記』に記されています。

身近にあった竹を生かして、明治時代の初期に^{せんす}扇子の骨組みである「^{せんこつ}扇骨」の製造を始めました。名古屋市北区や西区辺りで、盛んに名古屋扇子が作られていたことに、着目したと思われます。

扇骨作りを名古屋の職人に学び、明治時代から大正時代に盛んに作られるようになりました。扇子は、涼をとるために持つことをはじめ、茶道や日本舞踊、祭礼など多くの場面で用いられてきました。

大正 12(1923)年の関東大震災後は、経済の低迷により、出荷が低調になりますが、昭和になると消費が戻り、再



扇骨の完成



扇子の完成

び盛んになりました。

大正 13(1924)年の外国貿易年表を見ると、名古屋港から約 114 万本の扇子やうちわが輸出されていました。この扇子の多くに大治の扇骨が使われていたと思われ、どれだけ大きな産業であったかがうかがえます。

大治の一大産業だった扇骨製造は、日本文化を下支えする産業で、そこに多くの人が関わっていました。昭和 10(1935)年には町内に 96 業者と 300 人の従事者がいたといわれており、全国の生産量のほとんどを占めて



昭和 10 ～ 30 年代頃の扇骨作業風景



庭先や屋根などに傘のように広げて干される扇骨（昭和 63 年頃）

いました。

昭和 16 年に大治扇骨組合ができ、最盛期を迎えます。

昭和 30 年代には、専業または副業の家があり、多くの従事者がいました。そのほかにも内職で関わる人も多くあったそうです。

オート三輪で長い竹が運ばれてきた様子を覚えている人に聞くと、美しく真っすぐな竹だったといえます。

高度経済成長期になると、冷房設備の普及など生活様式の変化により、扇子の利用が激減しました。昭和 52(1977)年頃には、最盛期に比べ町内の業者が約 8 分の 1、従事者は約 15 分の 1 に減りました。

令和になると、扇骨業に携わる人はごくわずかになりましたが、庭先で傘のように扇骨を広げて干す、美しい風景はまだ見ることができます。

扇骨の製造工程

- ①切竹 短く輪切りにする
- ②竹割 使う寸法別に割って棒状にする
- ③煮る 変色やカビ防止の処置をする
- ④天日干し 次の作業のため、乾燥させる
- ⑤別げ 皮（表面）と肉（皮次）を分ける
- ⑥削り 寸法別に両面を削る
- ⑦目もみ 要の部分に穴を開ける
- ⑧骨さし 要の穴に細長いひごを通す
- ⑨水につける 仕上げの前準備のため
- ⑩荒仕上げ 親骨の大体の形をつくる
- ⑪骨ごし 骨を混ぜてまとめる
- ⑫2 度目の仕上げ ⑩と同じ
- ⑬天日干し 水分を飛ばす
- ⑭裏表をそろえる 骨の裏表をそろえる
- ⑮色だし 色を統一するために天日に干す
- ⑯薬品に漬ける 漂白剤に漬ける
- ⑰天日干し 水分を飛ばす
- ⑱仕上げ 骨の側面を削り、滑らかにする
- ⑲磨き 仕上げ後、さらに滑らかにする
- ⑳彫り 柄をつける
- ㉑末すき 紙に挿し込む箇所をさらに薄く削る
- ㉒合わせ 扇子 1 本分の骨を合わせる
- ㉓要打ち 骨を合わせて要を打ち、完成させる



①切竹



⑩仕上げ



㉓要打ち

町で手間ひまをかけて作られた扇骨は、完成後は名古屋市にある扇子の間屋に納められ、扇面や房などがつけられ、名古屋扇子として完成します。

第 4 節 経済活動を支える金融

まちの金融機関

● 3つの地方銀行と信用金庫

昭和 50（1975）年には、町内には 3つの金融機関がありました。

その後、人口の増加や経済活動の活発化により、次々と金融機関ができました。

金融機関は、個人や法人への預貸業務など、さまざまな金融商品とサービスを提供し、地域の経済活動を支えています。

● JAバンクとゆうちょ銀行

町内には農家のメインバンクといえる JAバンクが、あいち海部農業協同組合大治支店にあります。JAバンクは、地域の農家などに貯金や各種ローンなどの金融業務を行っています。

ゆうちょ銀行も地域と密着し、経済活動を支えています。町内には、大治郵便局（北間島）と大治西条郵便局（西條）があります。

表 4-3 町内の金融機関

町内開設年	開設時の名称	所在地	備 考
昭和 13 年	大治郵便局	八ツ屋	昭和 16 年に特定郵便局となる。昭和 41 年に東條に、平成 2 年に北間島に移転
昭和 24 年	大治村農業協同組合	馬島	平成 7 年に海部東農業協同組合大治支店、令和 6 年にあいち海部農業協同組合大治支店と商号変更
昭和 48 年	中京相互銀行大治支店	馬島	平成元年に中京銀行大治支店、令和 7 年にあいち銀行大治中央支店と商号変更
昭和 56 年	大治西条郵便局	西條	
昭和 58 年	中央相互銀行大治支店	馬島	平成元年に愛知銀行大治支店、令和 7 年にあいち銀行大治支店と商号変更
昭和 59 年	第三相互銀行豊公橋西支店	花常	平成元年に第三銀行と商号変更。平成 15 年に閉店
昭和 63 年	津島信用金庫大治支店	西條	平成 15 年に一宮信用金庫・愛北信用金庫と合併し、閉店
平成 4 年	名古屋銀行大治支店	三本木	
平成 6 年	一宮信用金庫大治支店	堀之内	平成 15 年に愛北信用金庫・津島信用金庫と合併し、いちい信用金庫大治支店と商号変更

水色枠内：昭和 50 年に町内に開設していた金融機関

なお、郵便の集荷や配達は、甚目寺郵便局（あま市）が取り扱っています。



あいち銀行 大治中央支店



名古屋銀行 大治支店



大治郵便局



甚目寺郵便局

●コンビニ

平成から令和にかけて、次々とコンビニエンスストアが開店しました。

店内に設置された ATM は、銀行サービスの一部として提供されています。



あいち銀行 大治支店



いちい信用金庫 大治支店



大治西条郵便局



あいち海部農業協同組合 大治支店